300-138
300
138

放大古法帖

第四卷

始

敎大古法帖

四

（孟法師碑銘）

300
138

放大古法帖

法帥碑銘

第四卷

（第四回配本）

中央書道協會

大阪府立図書館

300
138

一、本書は學書者のために、褚遂良の孟法師碑を、寫眞を以て放大して習ひよくしたものであります。

二、寫眞を以て放大すれば、最も正確なれど、幾分か氣分と連綴との相違がありますから、この短所を補ふために、原本大のものを、全部卷末に掲げて置きましたから、これと比較研究せられて、兩者の長のみを採られんことを切望します。

三、なほ代表文字を、書法上より分類したものと、竭、旁、冠、脚、繞、乘、構の部に分類したものとを掲げこれに說明して置きました。これは初學者に便せんがためであります。

孟法師碑銘

觀雀太陽始

旦指崦嵫其若馳臣川分

流赴瀚瀚而

不息是以至

人無己生天

地御六氣列

仙神化隱宇

宙而遺萬物

與齊魯縉紳
東名教於俄
景漢魏豪桀
殉榮利於窮

塗何異乎蜉
生於崇朝爭
長於龜鶴秋
豪出於未北

計大於崿閬
者哉若迺岱
山龍駕傳神
丹之祕決秦

都鳳祠流洞

簫之妙響用

能延頽年於

昧谷振朽骨

於玄廬白玉
之簡祈西王
而可值青雲
之衣師東陵

而易龍豈非
度世之寶術
登遐之妙道
焉法師俗姓

孟氏諱靜素
江夏安陸人
也其先從里
戍仁繼繼跡於

孔墨冬筍表

德薺聲於曾

閔是以貽則

當世錫類後

昆軒冨兎之盛
既富於天爵
賢明之質獨
表於仙才固

以軼俊貂之
弈弈雲而已哉
紛而慕道超
然拔俗志在

芝桂蘼蕳蓼

於穅粃心繫

煙霞方綺羅

於桎梏既而

初笄云畢迨
吉有典懿戚
託繼世之援
慈親割相離

之情千金甫

陳百兩將或

法師淩霜之

操[illegible]守節於

玄冬匪石之
誠揂揂生於
白刃素槩難
奪嘉禮遽寢

乃脫屣通德
之門絕景集
靈之館虔修
經式長甘蔬

菲漱元氣於
停午思輕舉
於中夜若夫
金簡玉字之

餘論玄牝道
樞之妙旨三
皇内文九鼎
丹法莫不究

其條畢猶登

山而小魯踐

其戶庭若披

雲而見日允

所謂天挺才
明人宗摸楷
者已隨高祖
文皇帝聞風

而悅徵赴京

師亦既來儀

居于至德之

觀公卿盡己

士女翹心於
是高視神州
廣開衆妙懸
明鏡於講肆

陳鴻鍾於靈
壇著錄之倡
升堂者比跡
閭道之客及

門者成羣雖
列星仰天
津衆山之宗
地軸未足以

喻也我高
祖以大聖締
基功踰覆載
皇上以欽

明綦歷道冠
犧農崇三清
以緯民懷九
仙而滑俗天

地交泰中外
和平法師維
持秤式弘宣
經典時歷叀

險懷趙璧而
無玷年殊盛
褱鼓吳濤而
不竭跡均有

待心時無爲
循大小於天
倪既齊椿菌
忘壽夭於物

化寧韡彭殤

而靈氣有感

仙骨夙著金

液方授駕白

龍而不反玉
棺遽掩望青
鳥之來翔以
貞觀十二年

七月十二日
遺形而化春
秋九十有七
顔色如生舉

體柔弱斯盖

仙經所謂尸

解者也冕旒

惜道閒之梁

壞縉悼紳人
師之云亡固
以恩徭徹樂
悲踰鞦相有

勅賜紫

跡霞舉玉京

雲開金液飛

廉先路句芒

奉辟形表丹
青聲流金石
玄風誰纂允
屬賢明翟衣

絶志鶴御依

情栖心大道

授蹟長生三

山可陟丸轉

方成靈巫化人

閒高

書法上より分類したる部

（附　扁・旁・冠・脚・垂・構・繞の分類）

解説

筆法の部

（一）勒法　一三玉孟上十

これは勒法といつて横棒を研究するために載せたのであります。起筆・収筆・運筆に注意して練習して下さい。最後の十の字は注意を加練してあります。これは特別の場合で余り常には使用しません。

（二）努法　午中神州悅

これは努法といつて縦棒の研究です。縦棒には垂針勢・垂露勢・鍵鉤勢の三種があり各其の運筆によつて造ひます。午、神の場、州の中央、悅の場の縦棒は鍵鉤で、神の旁、州の右邊の縦棒は垂露です。

（三）趯法　天金人奏足之通道超

これは趯法の研究です。趯法のことを鋭法とも挑法ともいひます。天金人奏などの如くやゝ短のものを鋭挑といひ、足之通道超などの如く横のものを横挑といひます。その中間の趯法は特殊のもので普通には余り使用しません。

（四）掃法　及屬居者有廣夏循彭

これは掃法の研究です。掃法のことを撇とも掃ともいひます。居者有廣の如きを縦撇といつて心地のよい程延ばして書くのです。及夏彭循などは一字中に掃が二つ以上ある場合を示したものです。この如きを連撇といつて方向及筆意に變化を持たしむることになつてゐます。

（五）策法　年

これは策法の研究です。年自重千などにあります。如かく力強く書くのです。

（六）趯法　東句榮集方乃寧也兩色民爲將衣宣衰風飛盛心思

これは趯法といつて勾の研究です。榮榮集の如く中にあるのを中勾といひ短かく力強く書きます。宇衛の如く曲りたる懸鉤について因るのを縛勾といつて長く書きます。旬の如きを勾劳といつて力強き努法について述ます。勾の如きを勾法といつて勾劳よりはやゝ緩かに中をつゝむ様に書きます。方乃の如きは斜鉤の文字について説る勾です。兩酉の如きは右勾といひ右側にある勾です。露焉の如きは風勾といひ二点をつゝむ氣分で書くのです。他色の如きは浮鉤といひ内側を大きく見ゆる様に書くのです。民盛の如きは、勾戈といつて中途にて余り曲らぬ様力の抜けぬ様に書くのです。衣宣は向右勾といつて右に向ふ時に全く筆をあらためて書き出すのです。風飛は背抱勾といつて目を特に力強くし中途で力の抜けの様書くのです。盛心は横勾といつて起筆に注意し一点をつゝむ様に書くのです。宣風覆は平勾といひ下向の時特に筆を改めて書くのです。この平覆の場合は注意を加味したもので普通には余り用ひません。

（七）側法　亡六玄京公其與無盖

これは側法といひ、点の研究です。亡六玄京は上点を承したものです上点は見そこの如く四種位變化があります。京の脚部の左右の点は梅核舎仁といひ、盖と胎筆に注意を要します。盖公の上部の点を半圓点といひ左右の抱き合ひ平均に注意を要します。其與の下部の点を其脚点といひ左右栄営に注意し上部を安定せしむる様に書くのです。無の如きは燕尾点といひ、各点の勢時を失はぬ中に變化を持たしむる様に書くのです。

（八）策法　流壊捐

これは策法の研究です。流の策は微挑といつて鋒挑に、壊の策は平挑といひやゝ慎重に、捐の策は横挑といつてやゝ重く書くのです。

結構法の部

（一）間架法　皇里津易惜

これは間架法の研究です。間架法とは文字の点画と点画との間隔の事です。皇里津は横割易は斜割惜は一般的の間架法です。皆其のあき間を揃へねばなりませぬ。

これは排仰、疎排、側背法の研究です。東榮集の如く中にあるのを中勾といひ短かく力強く書きます。宇衛の如く曲りたる懸鉤について因るのを縛勾といつて長く書きます。旬の如きを勾劳といつて力強き努法について述ます。勾の如きを勾法といつて勾劳よりはやゝ緩かに中をつゝむ様に書きます。方乃の如きは斜鉤の文字について説る勾です。兩酉の如きは右勾といひ右側にある勾です。露焉の如きは風勾といひ二点をつゝむ氣分で書くのです。他色の如きは浮鉤といひ内側を大きく見ゆる様に書くのです。民盛の如きは、勾戈といつて中途にて余り曲らぬ様力の抜けぬ様に書くのです。衣宣は向右勾といつて右に向ふ時に全く筆をあらためて書き出すのです。風飛は背抱勾といつて目を特に力強くし中途で力の抜けの様書くのです。盛心は横勾といつて起筆に注意し一点をつゝむ様に書くのです。宣風覆は平勾といひ下向の時特に筆を改めて書くのです。この平覆の場合は注意を加味したもので普通には余り用ひません。

（二）排法　生墓妙好

これは排法といひ、どの文字でもこの如くせねばなりませぬ。不墓の如きを疎排法といひ衆を充分展ばして書きます。妙の如きを側法といひ左右から突き出る詩を互に縫り合はせ相犯さぬ様に書きます。孔生の如きを背法といひ鼎形相背いて離れ離れになるから氣脈を通じ左右相親しむやうに書くのです。

（三）中心法　童雲帝方乎安骨百

これは文字の中心を研究するのです。童雲帝は上部の竪劃又は点と下部の竪劃とを中心の標準とするのです。方乎は上点と勾と、文安は上点と横とを合せを標準とします。百の如く中心とする標準なきものは最後の劃を優勢にして適當なる位置を取るのです。

（四）同姿別情法　景陸張翔鍛餘榮利護

これは同姿別情の法といひ一字中に同體のもの二つ以上ある場合は變化をつけ心ため一方を優勢にすることになつてゐます。景陸は上下が同體同様は左右が同勢位置は政法が二つ以上あり利護兎は勾が二つ以上あります。共に一方を優勢に一方を劣勢にとることになつてゐます

（五）增減假借法　神德歷庭時

これは增減假借法といひ文字の位置をとるために適宜に一劃を減じ或は増すことであります。神德は一劃を減じ歷は一点を加へて二劃を減じて庭時は一劃づゝ増してあります。これは必ず古人の通様に倣ふので自分勝手にすることは許されません。

（六）體救法　青巳刀白西守生春山固吉鑑小繼十才月變

これは文字の體裁の研究です。巳人乙などは長體といひ一方に偏してゐます。刀方力などは斜體といひ傾いてゐる字です。しかし短いて居る中にも自然に方正を保つやうに書くことが肝要です。春本などは変體といひまして上下左右同れにも偏らぬ様に書くのです。変吉は同體長く書きます。西四白などは短體といひ長くならぬ様に書きます。守可などは上篇といひ上を宜かに下を詰くします。春太などは下篇といつて、下を寛に上を詰くします。固國門などは平四角といつて上と下その間隔も大體平かに書します。しかし右相下がりになつて胸部の乗れるの多様します。變寛などの文字は大體といつて大きくなる字です。吉点劃が離れ〳〵にならぬ様中心に集める心持ちにて書くのです。白日などの文字は小體といひ小さくなる文字であります。これは文字の中心と見られます。巳南などは隔離目といひ、兩側が開ひて下隅が合ふ様にし、右肩下がりに脚の直になるのを應ひます。オトすなどは度体さいひ結構を貴びます。山土などは肥體といひ各点劃をやゝ間目に安らかに書きます。小上下などへ縮體といひやゝ太めに引きしめて書きます。十一丁などを孤体といひます。輕く力が抜け視せたるを選ひます。月弓などは単體といひ字形を少し長く点劃を略く書きます。

（七）撰譲法　勅味體御玄平聲

これは撰譲法の研究です。勅勅などは譲左といひ左を長く右を低くし右側は兵遠の色あるが如くし味時などは湾右といつて右を高く左を低くし左側は因遠の色あるが如くします。體鳳などは分側といひ兩人相立つが如く互に詰り合ひ相親しみて相犯さぬ様にします。御測などは三勾さいひ中間を正しくまの如く左右は臣下の態勢を取りて書くのです。玄青などは清横といひ横劃を長くし全體の重勢を横劃に譲る様に書くのです。甲千平などは譲直といひ縦劃に重勢を集中して書きます。重撃などの如きを前綜文字といひ、三部五に相犯さぬ様に各譲り合ひて書くのです。

（八）左右栄法　雷弈升聊明相弘

これは左右栄営法の研究です。雷赤などは左垂といひ、右邊を長くすることを選ひます。升頭郎などは右垂といひ右を長くします。相聊などの様に小なる者が右にある時は下平といつて下を平にします。また弘の如く右邊極めて小なるものは中邊に置きます。

（九）地歩法　雲衆割地仰鄭喜

これは地歩営位の研究です。雲衆割などは上古地歩といつて上面側にして書廣く下面平くして重く書くのであります。衆割などは下古地歩といつて下面を寛かに輕く下を平く重く書くのです、割敬などは左邊を大にし割を細くし右邊を小にし割を太くするのです。地敬などは右古地歩といつて前と反対にします。仰などは左右古地歩といつて左右の割を細く形を長くし中間の割を太く形を短くするのです。喜鳳などは上下古地歩といつて上下を寛く割を細目にし下間を平く割は太目に書くのです。喜雨などは中古地歩といつて中間を寛大にし他を強く平くするのです。

(ロ) 上下安置法

宗至雲素金
谷鑒文

これは上下安置法の研究です。宗官のやうに冠のある字は天覆といつて總て上の冠を以て下を覆ふやうに書くのです。但し恭安定の如く下部自然に廣くなる割のある場合は例外です。至里などの樣に下割に積餘のある字を地載といひ上部を輕く下部を慎重にし上部を安らかに載せて居る樣に書くのです。雲留の樣に上下二部よりなる文字を二段といひ三部の吾量を考へて平均を失はぬやうに書きます。業意の如く三部よりなる文字を三段といひ三部の吾量を考へて平均を失はぬやうに書きます。金合の如きを重下といひ兩邊が平かに伸びて居るのを喜びます。鑒などを積といひ点割のこみ合ひに注意して位置をとるのです。文天父などは承上といひ上を受くる文の交はる所が文字の真中にあるやうに書きます。

以上の研究にて書法の大體は略々了解出來ると思ひますが猶此の上に扁、旁、冠、脚、構、繞、乘、構の部及これらの附かぬ單獨文字の部に分類して掲げて置きます。

備考（一）、この部は前の應用で書法上の区別は必要ありませんから略しします。同じものでも體の違ふものや勢の異なるものは掲げて置きました。

一、扁の附く文字の部（仙傳澤叶地壇姓妙德振授梧棺法濤獨隨策於貽時殊姪牝物玷祕視明碑秋初將維綺蚜解謙託賜踰跡貂軒錫餘馳體滝）

二、旁の附く文字の部（列御形幼都所教鼓肆欽離類鵜觀）

三、冠の附く文字の部（玄公冠宗居豈藏星爭爵當羅者登豪窮莽雲歷）

四、脚の附く文字の部（塗慕志榮然瑩蓋質幕尊翌）

五、繞の附く文字の部（允先遽延赴翹）

六、構の附く文字の部（用句匪固夙氣術虔虛問）

七、乘の附く文字の部（慶）

八、單獨の文字（二人士小女山川己文心方日月玉氏白玄生門甘石至而衣見長金青非骨高鳥鼎齊）

三玉孟上十午中
神州悅天金人秦
弔之之道迺超趙

居屬者有廣及夏
循彭年東桀集字
寧句均方乃兩而
為焉將也色民盛
衣裘風飛心思宣
虞霞亡六玄京蓋

公其與流無壞捐
皇津易生慕孔妙
堂靈帝方乎安百
景陸弱翔輟餘榮
利踐碑德歷庭辟
巳刃生樂吉青西

守春固門響白而
才山龜小繼十月
勑昧體御玄平聲

弈升卿明相弘雲
衆割地仰駕嘉宗
至雲素金谷靈文

仙傳瀜叶地壇姙
妙德御樞授梏棺
法濤獨隨陳於於

時殊煙牝物玷祕
祖明碑秋初將維
綺蜉解誰託貽賜

踰跡軺軒錫餘馳
體龍列御形紛都
祈教欽肆鼓離類
鶴觀玄公冠宗居
豈蔬星爭爵當羅
者登豢窮軺笄雲歷

塗慕志梁然聖蓋
質篡聲翟允先遽
延赴翹用句匪固
夙氣術虔虛閒廉
二人士大小女山
川巳文心方日月

玉氏白玄生門甘
石至而衣見長金
青非骨高鳥鼎齊

原本の部

泉本の拓

已生天地御六氣列
仙神化陰陽寧宙而遺
萬物與齊魯縉紳東名
教於俄昌漢魏豪桀殉

榮利於窮塗何旦乎蜉
生於崇朝爭長於龜鶴
秋毫出於末批計大於
崼閬者哉若迺岱山龍

駕傳神丹之祕決秦都
鳳祠流洞簫之妙響用
能延頽年於昧谷振朽
骨於玄廬白玉之簡祈

西王而可值青霞之衣
師東陵而易襲豈非度
世之寶術登遐之妙道
焉法師俗姓孟氏諱靜

素江夏安陸人也其先
徙里成仁繼跡於孔墨
冬筍表德蔣聲於曾閔
是以貽則當世錫類後
昆軒冕之盛既富於天
爵賢明之質獨表於仙
才固以軼仲昭之弈
冀而已哉紘而慕道超

然拔俗志在芝桂譬蕓
蓼於穠秕心繫煙霞方
綺羅於桎梏曉而初笄
云畢逆吉有典懿戚託

繼世之援慈親割相離
之情千金甫用陳百兩將
戎法師淩霜之操□守
節於玄冬匪石之誠揺

捐生於白刃素槩難奪
嘉禮遽寢乃脫屐通德
六門絶景集靈之館虔
修經式長甘蔬菲淡元

氣於停午思輕舉於中
衣若夫金簡玉字五餘
論玄牝道樞之妙旨二
皇內文九鼎丹法莫不

究其條貫猶益孟而小
魯踐其戶庭若披雲
而見日光所謂天挺才
明人宗摸楷者已隨高

祖文皇帝聞風而悅徵
赴京師亦既來儀居子
至德之觀公鄉虛己士
女翹心於是高視神州

廣開衆妙懸明鏡於講
肆陳鴻鍾於靈壇著錄
之侶升堂者比跡問道
之客及閫者成羣雖列

星仰天津衆山之宗
地軸未足以喻也
我高祖以大聖締基功
踰霞載
皇上以欽

明慕歷道冠犧農崇三
清人緯民懷九仙而濟
俗天地交泰中外和平
法師維持耕戎弘宣經

歟時歷夷險懷趙璧而
無玷年殊盛衰數吳濤
而不竭跡均有待心叶
無爲循大小於天倪踐

齊椿菌忘壽夭於物化
寧辯彭殤而靈氣有感
仙骨夙著金液方授駕
白龍而不及玉棺遽掩

望青鳥之來翔以貞觀
十二年七月十二日遺
形而化春秋九十有七
顏色如生舉體柔弱斯

蓋仙經所謂尸解者也

免旒惜道門之梁壞縉

紳悼人師之云亡固以

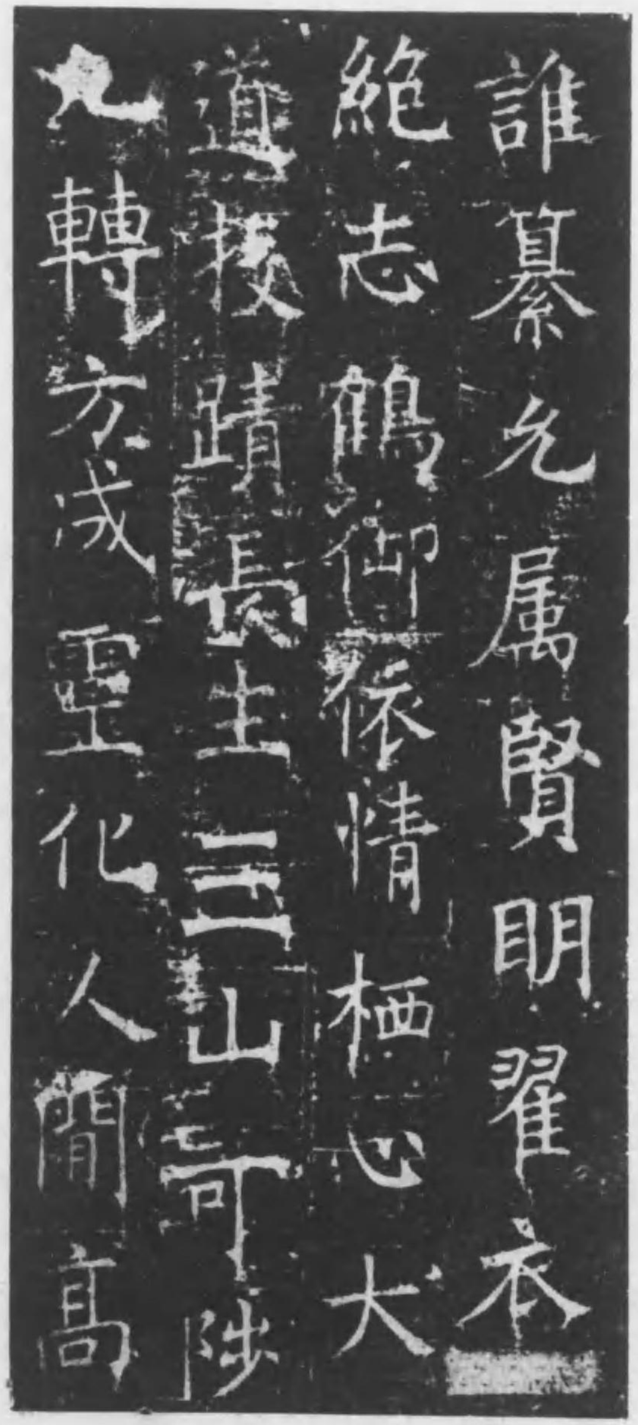
恩深徹樂悲踰轂相有

粉賜人賻

跡霞舉玉京雲開金液

飛廉先路句芒奉辟形

表丹青聲流金石玄風



孟法師碑解說

褚遂良は、支那中古の太宗時代の人であります。當時は書道が尤も發達隆盛を極めた時で、有名な能書家が輩出致しましたが、藝術味の豐かな点では褚遂良が第一と云ふべきであります。

この孟法師の碑は、褚遂良四十七の時の書で、處の温雅味と歐の險勁味とを採り、これに六朝の雄大味を加へ、更に隷意を交へて莊重な趣を帶ばしめたもので、その結構の嚴正なること、正莊古厚なることなどでは、全く他に其の比を見ぬ名帖で御座います。

近時この帖の研究が盛となつたのは洵に斯道のために慶賀すべき事だと思ひます。

讀み方

唐京師至德觀法主孟法師碑銘

觀、夫大陽始旦。指二崦嵫一、其若二馳。巨川分流。悬二湯瀨一而不レ息。是以至人無レ已、先二天地一、而御二六氣一。列仙神化。陰二宇宙一、而遺二萬物一、與。夫齊魯稽神、東二名教於俄景一、漢魏豪榮、殉二奉利於羽塗一、何異乎蜉蝣生二於崇朝一、爭長於鷦鷯一、秋毫出二於未兆一、肸二大於崐閬一者レ哉。若遊二岱山龍駕一、傳二神丹之秘決一、秦都鳳闕、流二洞籙之妙響一、用能延二頤年於昧谷一、振二朽骨於玄虛一、白玉之簡、祈二西王一、而可レ値、青雲之依、師二東陵一、而易レ襲、豈非二度世之寶術登遐之妙道一焉。

觀すること、天の太陽の始めて旦するや。崦嵫を指して其れ馳するが如し巨川の分流するや。湯海に赴きて息まず。是を以て至人は已むこと無く天地に先だちて六氣を御す。列仙の神化するや。宇宙を陰しとして萬物を遺る。夫れ齊魯の稽神は、名教を俄景に東し、漢魏の豪榮は、奉利に羽塗に殉するは、何ぞ蜉蝣の崇朝に生きて、長を鷦鷯に爭ひ、秋毫の未兆に出でて、大を崐閬に計る者に異たらんや。若し遊ぢ岱山の龍駕は、神丹の秘決を傳へ、秦都の鳳闕は、洞籙の妙響を流し、用て延く頤年を昧谷に延ばし、朽骨を玄虛に振かし、白玉の簡は、西王に祈りて値ふ可く、青雲の衣は、東陵を師として襲わ易きは、豈度世の寶術、登遐の妙道に非すや。

法師俗姓孟氏、諱靜素、江夏安陸人也。其先徙二里成一仁、繼二跡於孔墨一、冬筍表レ德、齊二聲於曾閔一。是以貽二則當世一、錫二類後昆一、軒冕之盛、既富二於天爵一、賢明之質、獨表二於仙才一。固以帙二仲躬之奉業一。邁二陽元之餘慶一者矣。

法師俗姓は孟氏、諱は靜素、江夏安陸の人なり。其の先里を徙し仁を成して跡を孔墨に繼ぎ、冬筍德を表して、聲を曾閔に齊しくせり。是を以て則を當世に貽し、類を後昆に錫ひ、軒冕の盛なること、既に天爵に富み、賢明の質、獨り仙才を表せり。固より以て仲躬の奉業に帙ぎ、陽元の餘慶に邁でる者なり。

法師亮二兩儀之靈和一、體二五常之休德一、崇蘭散レ馥、掩二蕙艾芳春一、朗月揚レ暉、蕩二雲霧於清夜一。盈尺之寶、出二鄢郢一、而連城徑寸之珍、入二大梁一、而照乘。豈惟揚二虞異才一、騁二聲益部一、曹稱二孝行一、播二美上虞一而已哉。

法師兩儀の靈和を亮け、五常の休德を體し、崇蘭散レ馥を散じて、蕙艾を芳春に掩ひ、朗月暉を揚げて、雲霧を清夜に蕩ふ。盈尺の寶は、鄢郢より出でて、連城徑寸の珍は、大梁に入りて照乘。

す。靈帷に號を異才に揚げ譽を盛都に馳せ、曹孝行を稱して、美を上庠に擅くのみならんや。

幼而慕道、超然抜俗、志在芝桂、譬若篆於紬秘、心繫煙霞、方綺麗於桂楮。既而初筭云畢、迨吉有典。懿戚託纓世之援、慈親割相離之情、千金甫陳、百兩將戒。法師凌霜之操、必守節於玄冬、匪石之誠、誓捐生於白刃。素堅難奪、高禮遂寢。乃脫屣遁德之門、絕景集靈之館、虔修經戒、長甘蔬菲、漱元氣於停午、思輕舉於中夜。

幼にして道を慕ひ、超然として俗を抜き、志は芝桂に在りて、篆を紬秘に譬へ、心は煙霞に繫りて、綺麗を桂楮に方ぶ。既にして初筭云に畢り、吉に迨ぶこと典有らんとす。懿戚は纓世の援を託し、慈親は相離の情を割き、千金甫めて陳ね、百兩將に戒めんとす。法師の凌霜の操必ず節を玄冬に守り、匪石の誠、誓つて生を白刃に捐てんとす。素堅奪ひ難く、高禮遂に寢めり。乃ち屣を遁德の門に脫し、景を集靈の館に絕ち經戒を虔修して、長へに、蔬菲を甘んじ、元氣を停午に漱ぎ、輕舉を中夜に思ふ。

若夫金簡玉字之餘論、玄牝道樞之妙旨、三皇內文、九鼎丹法、莫不究其條貫。猶登山而小魯、躡其戶庭、若披雲而見日。允所謂天挺才明、人宗模楷者已。

若し夫れ金簡玉字の餘論、玄牝道樞の妙旨、三皇の內文、九鼎の丹法、其の條貫を究めざること莫し。猶山に登りて魯を小なりとするがごとく其の戶庭を躡めば、雲を披きて日を見るが若し。允に謂はゆる天才明を挺して、人模楷を宗とする者のみ。

隋高祖文皇帝、聞風而悅、徵赴京師。亦既來儀、居于至德之觀。公卿虛己、士女嚮心。於是高視神州、廣開衆妙、懸明鏡於講肆、陳鴻鍾於靈壇。著錄之侶、升堂者比跡、問道之客、及門者成羣。雖列星之仰天津、衆山之宗地軸、未足以喩也。

隋の高祖文皇帝、風を聞きて悅び、徵して京師に赴かしむ。亦既に來儀して、至德の觀に居る。公卿己を虛しくし、士女心を嚮く。是に於て神州を高視して、廣く衆妙を開き、明鏡を講肆に懸け、鴻鍾を靈壇に陳ぬ。著錄の侶、堂に升る者跡を比べ、問道の客、門に及ぶ者羣を成せり。列星の天津を仰ぎ、衆山の地軸を宗とすと雖も、未だ以て喩ふるに足らざるなり。

我高祖以大聖締基、功踰覆載。皇上以欽明纂歷、道冠犧農。崇三清以綏民、懷九仙而濟俗。天地交泰、中外和平。法師擁持科戒、弘宣經典。時歷夷險、懷道璧而無玷。年殊盛衰、鼓吳濤而不竭。跡均有待、心叶無爲。循大小於天倪、既齊椿菌。忘壽夭於物化、寧歸彭殤。而靈氣有感、仙骨夙著。金液方授、駕白龍而不反。玉棺遽掩、望青鳥之來翔。以貞觀十二年七月十二日、遺形而化。春秋九十有七。顏色如生、舉體柔弱。斯蓋經仙所謂尸解者也。是旒惜道門之梁壞、縉紳悼人師之云亡。固以恩佇徹樂、悲踰輟相。有勑賜以賻贈。賷給葬事、並加隆焉。弟子陳光等、義結在三、名高入室。對衣履而增絕、瞻風雲而永慕。思欲寄銘讚以敍思、勒琬琰以紀德、俾夫成銀之室、神變久而若存、而遺履之地、靈蹟垂於不朽。其詞曰、

我が高祖は、大聖を以て基を締し、功は覆載に踰えたり、皇上は、欽明を以て曆を纂ぎ、道は犧農に冠たり。三清を崇めて以て民を綏し、九仙を懷けて而して俗を濟へり。天地交々泰く、中外和平なり。法師科戒を持擁して、經典を弘宣す。時は夷險を歷れども、道璧を懷きて而かも玷くること無し。年は盛衰を殊にするも、吳濤を鼓して竭きず。跡は均しく待つこと有りて、心は無爲に叶ふ。大小を天倪に循ひて、既に椿菌を齊しくす。壽夭を物化に忘る。寧ろ彭殤を歸ぜんや。而して靈氣感有り仙骨夙に著はる。金液方に授け、白龍を駕して反らず。玉棺遽に掩ひ、青鳥の來翔を望む。貞觀十二年七月十二日を以て、形を遺して化す。春秋九十有七。顏色生けるが如く、舉體柔弱なり。斯れ蓋し仙經の謂はゆる尸解なる者なり。是旒は道門の梁壞を惜み、縉紳は人師の云に亡きを悼めり。固に以て恩は樂を徹するに佇しく、悲は相を輟むるに踰えたり。勑有りて賜ふに賻贈を以てす。葬事に賷給し、並に隆を加ふ。弟子陳光等、義は在三に結び、名は入室に高し。衣履に對して增々絕し、風雲を瞻て永く慕ふ。銘讚に寄せて以て思を敍べ、琬琰に勒し、以て德を紀し、夫の成銀の室をして、神變久しくして若く存し、遺履の地をして靈跡不朽に垂れしめんと思欲す。其の詞に曰く、

西秦靈蹕、東陵聖跡、蹕舉玉京、雲開金液。飛廉先路、句芒奉璧。形表丹青、聲流金石。玄風肆墓、允屬賢明。褐衣絕志、獨御依情。栖心大道、投蹟長生。三山可陟、九轉方成。靈化人間、高翔羽服。白蜺捲蓋、青虬夾轂。丹爐留煙、仙壇除竹。貽則終古、永播蘭菊。

貞觀十六年五月戊午造

中書侍郞江陵縣開國子岑文本作文

諫議大夫褚遂良書　萬文韶刻字

西秦の靈蹕、東陵の聖跡、蹕は玉京に舉がり、雲は金液に開く。飛廉路に先んじ、句芒璧を奉ず。形は丹青に表し、聲は金石に流る。玄風肆か墓ぐ、允に賢明に屬す。褐衣志を絕ちて、獨御情に依る。心を大道に栖ましめ、蹟を長生に投ず。三山陟る可く、九轉方に成る。靈人間を化し、高羽服を翔く。白蜺蓋を捲して、青虬轂を夾む。丹爐煙を留めて、仙壇竹を除す。則を終古に貽して、永く蘭菊を播く。

貞觀十六年五月戊午造

中書侍郞江陵縣開國子岑文本作文

諫議大夫褚遂良書　萬文韶刻字

300
138

昭和十五年十一月三十日印刷
昭和十五年十二月十日發行

放大古法帖（孟法師碑）

不許複製

編輯兼發行人　中根貞臣　岡崎市能見町一九
印刷所　中央習道協會專屬印刷所
印刷人　岩堀惠以　岡崎市能見町一九

賣捌所　東京大東文館　東京堂　東北星野書店　海陸堂書館

發行所　岡崎市能見町一九
中央書道協會
電話（岡崎）一九〇番
振替口座（名古屋一二二二二番　東京一九一四七番）

（定金四圓五拾錢）

300
138

終